

# 教育研究業績書

2017年10月20日

所属：英語文化学科

資格：准教授

氏名：山田 慎人

研究分野	研究内容のキーワード
近代ヨーロッパ国際関係史	
学位	最終学歴
博士（近代史）、法学修士	ロンドン大学大学院 LSE 国際関係史学部 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
<b>2 学位論文</b>				
1. George Canning and the Concert of Europe, September 1822-July 1824	単	2004年06月		ロンドン大学に提出した博士論文。外交史の定説によれば、1820年代イギリスの外交指導者カニングは、典型的なイギリスの孤立主義者であり、彼の外交の最大の目的は当時のヨーロッパの大国間協調体制の破壊にあった。本論文は、綿密な一次史料の再検討により、彼の目的が欧州協調の破壊ではなく、むしろそれをイギリスを含むすべての大国に受け入れられる体制へと変革することであったと示した。
<b>3 学術論文</b>				
1. ネーデルラント反乱をめぐる西ヨーロッパ国際関係、1559~1572	単	2013年	Mukogawa Literary Review, no. 51, pp. 55-82	ネーデルラントにおける反乱の発生過程、初期の反乱、そして、フランスやイングランドなど周辺諸国の対応を分析した。
2. フランス宗教戦争の勃発	単	2013年	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）、61巻、23-31頁	16世紀後半の西ヨーロッパ国際関係に大きな影響を与えたフランスの宗教戦争の勃発の過程と初期の戦いを分析し、共同体に秩序を与える宗教の機能の破壊者としての異端への憎悪、教義上の相違を解決することの難しさ、新旧両派リーダーの政治的野心、戦いに名誉を求める騎士階級のメンタリティー、当時の国家財政の弱さなど、さまざま要因が内戦の勃発と長期化に影響したことを明らかにした。
3. Canning, the principle of non-interference and the struggle for influence in Portugal, 1822-5 (査読付)	単	2013年	Historical Research (Wiley), vol. 86, no. 234, pp. 661-83	ジョージ・カニングのポルトガルにおける政情不安への対応を分析し、通説に反して、カニングが不介入主義を絶対を守るべき原則とみなしておらず、恒常的にポルトガル内政に介入していたこと、しかし同時に、議会での批判や諸外国にも介入の口実を与えることを恐れて、不介入主義を維持しているという見せかけを出来るだけ維持しようと努力したことを明らかにした。
4. カール5世、フランソワ1世、オス	単	2012年	Mukogawa Literary Rev	不介入主義の関連を明らかにした。 神聖ローマ皇帝カール5世の時代の西ヨーロッパの国

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
マン帝国、プロテスタント教徒— 16世紀前半のヨーロッパにおける 宗教と国際政治—			iew, no. 49, pp. 57— 92	際関係を分析し、1648年以前の国際関係が宗教的熱 情に支配されていたという通説が誤っていること、 そして、そもそも宗教と政治の二項対立から当時の 国際関係を分析することは間違っており、当時の支 配者が宗教が共同体に安定を与える機能を重視し、 政治的観点から宗教の問題に対処したことを明らか にした。
5. ハプスブルク領ネーデルラントの 防衛とフェリペとイングランド女 王メアリー1世の結婚—1550年代 の西ヨーロッパ国際関係—		2012年	武庫川女子大学紀要（ 人文・社会科学）、60 巻、23—31頁	1550年代の西ヨーロッパ国際関係を、スペイン国王 フェリペ2世とイングランド女王メアリー1世の結婚 を軸に分析し、当時の国際関係において、戦略的思 考の萌芽は見られるものの、いまだ王朝の権利や名 誉といった前近代的な目標が重視され、また、目標 達成の手段についても王家の間の結婚に代表される ような前近代的な方法がとられたことを明らかにし た。
6. ヨーロッパ国際関係の幕開け？— 1494年のフランスのイタリア侵攻 —	単	2011年	Mukogawa Literary Rev iew, no. 47, pp. 35— 73	近代ヨーロッパ国際関係の起点としてしばしば挙げ られる1494年のフランス国王シャルル8世によるイ タリア半島への侵攻を再検討し、そのヨーロッパ国 際関係の発展過程における歴史的意義を明らかにし た。
7. ハプスブルク帝国の覇権？—1510 年代末~1520年代の西ヨーロッパ 国際関係—	単	2011年	Mukogawa Literary Rev iew, no. 48, pp. 49— 81	1510年代末から1520年代にかけての所謂ハプスブル ク帝国の形成、確立期の西ヨーロッパ国際関係を分 析し、ハプスブルク家のカールの最大の目的が家の 名誉や権利の保護にあり、ハプスブルク家による覇 権の追求とそれに対する他の勢力の対応という点か らこの時代を分析する一般的な見方が誤りであるこ とを明らかにした。
8. ヨーロッパにおける国際関係の出 現	単	2010年02月	Mukogawa Literary Rev iew	中世からルネサンス期イタリアに至る西欧の国際的 状況を概観し、1648年のヴェストファーレン条 約を境に教権と帝権という二つの普遍的権威を柱と する中世的秩序が突如崩壊して主権国家システムが 誕生したという国際関係論の定説を否定し、中世に おいて教権と帝権の普遍性には限界があったこと、 中世的秩序から近代的秩序への変化が通常信じられ ているより遥かに緩やかな過程であったことを示し た。
9. George Canning and the Spanish Question, September 1822 to M arch 1823 (査読付)	単	2009年06月	The Historical Journa l (Cambridge Universi ty Press)	1820年代半ばのイギリス外交をリードしたジョ ージ・カニングが、1822年秋から1823年春 にかけて、フランスのスペインへの軍事介入の問題 に対してとった政策を綿密に分析し、彼の外交がヨ ーロッパの大国間協調体制の破壊を目的としていた という伝統的な見方が正しくないことを証明した。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. ウィーン体制の安定と「欧州協調 」	単	2006年12月		19世紀ヨーロッパの大国間協調体制である「欧州協 調」に関する従来の一般的な説明の問題点を指摘し 、それが実際にどのように出現し、また、19世紀ヨ ーロッパ国際秩序の安定に、どのような、そしてど の程度の役割を果たしたのかを概観した。
2. 佐々木雄太・木畑洋一編「イギリ ス外交史」（有斐閣、2005年）の 序章及び第1章の書評発表	単	2006年06月		日本のイギリス外交史研究者たちの共著によるイ ギリス外交史の通史として出版された上記の教科書 の中で、特に私の研究分野と近い19世紀半ばまでを扱 った序章と第1章を批判的に分析した。
3. ジョージ・カニングと「欧州協調 」、1822年9月—1824年7月	単	2005年04月		前年にロンドン大学に提出した博士論文の内容を中 心に、カニングの外交と欧州協調の関係に焦点をあ てながら、1823年のフランス—スペイン戦争、ポ ルトガルの政情不安、スペイン領南アメリカ及びブラ ジルの独立問題、ギリシア独立問題などの諸問題に 関するカニングの外交について分析した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. サントリー文化財団 継続	単	2006年		ジョージ・カニングの外交を中心とするウィーン体 制期ヨーロッパ国際関係の研究
2. サントリー文化財団 新規	単	2005年		ジョージ・カニングの外交を中心とするウィーン体 制期ヨーロッパ国際関係の研究

学会及び社会における活動等

年月日	事項